下顎頭に生じた周辺性骨腫の1例

窪田 善之・高塚 茂行・成之坊昌功
中川 清昌・山本 悦秀

A case of peripheral osteoma arising in the condyle

Yoshiyuki KUBOTA・Shigeyuki TAKATSUKA・Masayoshi NARINOBOU
Kiyomasa NAKAGAWA・Etsuhide YAMAMOTO

Abstract: Osteoma is frequently found in the field of oral surgery. Although most osteomas occur in the maxillary sinus, the condylar head is a rare location for these lesions. The present report describes a case of condylar osteoma. A 47-year-old woman consulted the oral surgery clinic at Kanazawa University on Sept. 19, 1994. Her chief complaint was TMJ discomfort on chewing. Radiographic examination showed osseous hyperplasia at the left condyle. The lesion was resected under general anesthesia on Nov. 15, 1994. Histologic examination revealed that the lesion was an osteoma. The postoperative course was good. Three months after surgery, the patient could open her mouth more than 40 mm without discomfort. However, careful follow-up is necessary.

Key words: peripheral osteoma (周辺性骨腫), condyle (下顎頭)

緒 言

骨腫 (osteoma) は骨組織よりなる腫瘍で、顎口腔領域では顎骨内部に生ずる中心性骨腫 (central osteoma) は、外骨膜性の周辺性骨腫 (peripheral osteoma) がある。この腫瘍の性格としてきわめて緩徐な増殖をするため、他の疾患等でX線撮影をしたとき偶然に発見されることが多い。上顎では犬歯窩部、硬口蓋部、上顎洞部、下顎では下顎角部の内外縁、臼歯部の舌側などに好発し、顎関節部に発生するものは比較的まれといわれている。今回われわれは、下顎頭に生じた周辺性骨腫の1例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

症 例

患 者：47歳，女性，自営業。
初 診：1994年9月■日。

金沢大学医学部歯科口腔外科学講座
(主任：山本悦秀教授)

Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
School of Medicine, Kanazawa University (Chief:
Prof. Etsuhide Yamamoto)
受付日：平成8年5月8日

主 訴：開口時右側顎関節痛。

既往歴，家族歴：特記事項なし。

現病歴：1992年春頃より右側顎関節部に違和感を自覚していたが放置，1994年9月頃より開口時，咀嚼時に若干の疼痛を覚えるようになり，1994年9月■日当科での精査を希望して受診した。

現 症

全身所見：体格は中程度で，栄養状態は良好，骨格その他に異常所見は観察されなかった。

顔貌所見：正貌でオトガイ部に軽度の左方偏位が認められた。

口腔内所見：開口量39mm，開口時，右側顎関節にクリックが，開口時および咬合時に疼痛が認められた。また左側での咀嚼癖があり，中心咬合位で右側臼歯部に開咬が認められた。

画像所見：オルソパントモ像では右側下顎頭の肥大化がみられ，下顎骨の下方への偏位と左側への偏位が認められた(写真1)。

X線CTにより右側下顎頭に，直径約20mmの骨様像が認められた。下顎頭の骨破壊像や骨透過像は認められなかった(写真2)。またMRIにより右側関節突起部から上方および前方部に連続した突出する腫瘤を

写真1 初診時パントモ X 線写真
右側下顎頭部に明らかな肥大化を認める。(矢印)

写真2 初診時 CT 写真
右側下顎頭周囲に層板状の骨様像を認める(矢印)。下顎頭には骨髓腔の拡大などは認めない。

認めたが、関節円板の転位は認めなかった。骨シンチグラフィーでは右側下顎頭部に $^{99m}\text{Tc-MDP}$ の集積増加が認められた。

ECG：異常所見なし。

血液検査：正常範囲内で、異常所見なし。

臨床診断：右側下顎頭部腫瘍の疑い (osteoma または osteochondroma)。

処置および経過：1994 年 11 月 日全身麻酔下に、腫瘍切除術を施行した。手術はまず右側耳前部の皮膚を切開し、鈍的に剥離を行ない関節包部を露出した。上下関節包を開放したが関節腔の線維性癒着や関節円板の転位は認めなかったため、特に処置は行わなかった。下顎頭部を表出させたところ、下顎頭の前方および上方部に粗造な骨様の新生物の添加が認められた。正常骨頭部との境界は不明瞭で下顎頭前方部へ外向性の増殖を認めた(写真3)。

線維骨様硬の腫瘍は、下顎頭部よりマイセル、マレット、タービン、ファイルを用いて削除し、下顎頭の形態修正を行った(写真4、写真5)。線維骨様硬の新生物は一塊としては摘出できず、多数の削片として切除した。下顎頭の形態修正後、切開創は各層ごと縫合を行い、閉鎖した。

術後一時的な開口障害が認められ、術後2日目の最

写真3 術中写真
粗造な新生物の添加を認める。

写真4 術中切除物写真
一塊としては摘出できず10数個の小片として切除した。

写真5 術後パントモ X 線写真
両側下顎頭の形態差は修正されている。

大開口量は22mmであったが、術後5日目には31mmに増加した。術後5日目より開口訓練を行い、7日目に抜糸、術後9日目となる11月 日、術後経過良好につき退院した。術後3か月では、安定した最大開口量(40mm以上)が得られ、一時的な術後の顔面神経麻痺も完全に回復した。

病理組織所見：標本組織像は、成熟した層板骨組織から成り、また一部には骨梁間の骨髓組織も認められ、いわゆる緻密骨腫に近い混在型の組織像を示していた(写真6)。

写真6 病理組織像

層板骨様組織と、一部には骨梁間の骨髄腔を認め混在型の組織像をしめす。
(×10, H-E染色)

考 察

顎骨には發育異常、炎症性あるいは反応性の骨増生が多く認められ、真の腫瘍と考えられるものはまれであり、内骨症(enostosis)、硬化性骨炎、線維性骨異形成症もしくは化骨性線維腫の骨化の著しいものであることが多く、周辺性の場合も發育異常、ないし反応性の外骨症(exostosis)、骨軟骨腫の骨化したものであることが少なくない。本症例ではX線CTにより、正常下顎頭とは明瞭な境界を有し、また病理組織学的には成熟した層板骨組織の構造を認めた。以上のことから総合的に骨腫と診断した。

骨腫には骨の外側に膨隆する周辺性骨腫(peripheral osteoma)または骨の内部に生じる中心性骨腫(central osteoma)とがある。また組織学的には緻密骨腫(compact osteoma)と梁状骨腫(osteoma spongiosum)およびその両者の混在型である(combination type)がある¹⁾。全身のうちでも顎顔面領域は比較的骨腫の好発部位であるとされるが、その多くは上顎に発生し、犬歯窩、上顎洞部、硬口蓋部での発生が報告されている²⁾。本例のように下顎骨に生じた周辺性骨腫は報告が少なく、また下顎頭に生じたものは国外文献においてはSeymourら³⁾、Weinbergら⁴⁾、Besshoら⁵⁾、国内文献では西嶋ら²⁾、小牧ら⁶⁾それぞれ数例が報告されるのみであった。

骨腫の原因については先天性、内分泌、慢性炎症、外傷等が以前より挙げられるが⁷⁾、現在なお不明な点が多い。特に外傷については発生要因として重視する報告も多いが⁸⁾検索症例では外傷の既往のある症例

はむしろ少数であった。本症例についても骨腫の発生に関係すると考えられる外傷の既往はなかった。

骨腫の治療法については、一般的に無症状である場合、処置を必ずしも必要としないが、機能障害などを伴う症例に対しては、骨腫の切除が施行されている。一般に腫瘍切除後の再発はほとんどみられず、悪性転化の報告はない。本症例も術後経過は良好であるが、その発生部位が比較的まれであり、かつ機能的にたえず負荷のかかる部位であることから長期にわたる経過観察が必要と考える。

近年、顎関節疾患の診断技術の向上に伴い同部についてX線診査をはじめとした画像診断を行う機会が増加していることから、今後顎関節部の骨腫をはじめとした腫瘍性疾患の解明が一層向上するものとする。

結 語

47歳女性の右側下顎頭に生じた周辺性骨腫の1例を経験したので、その概要について報告した。

本論文の要旨は、1995年7月、第8回日本顎関節学会総会(横浜)において報告した。

引 用 文 献

- 1) 貞森平樹, 長島駿一郎, 他: 下顎臼歯部舌側に発生した周辺性骨腫の1例. 岡山歯誌 5: 117-119 1986.
- 2) 西嶋克巳他: 右側顎関節部に発生した骨腫の1例. 日口外誌 20: 365 1974.
- 3) Seymour, R.A.: Osteoma of the condyle. J Oral Surg. 52: 223 1981.
- 4) Weinberg, S.: Osteoma of the mandibular condyle: Report of a case. J Oral Surg. 35: 929 1977.
- 5) Bessho, K., Murakami, K., et al: Osteoma in mandibular condyle. Int J Oral Maxillofac Surg. 16: 372 1987.
- 6) 小牧完二, 下郷和雄: 下顎頭にみられた骨腫. 口腔腫瘍研究会誌 5: 99-100 1987.
- 7) 高瀬裕志, 前多一雄, 他: 下顎骨に生じた周辺性骨腫の1例. 日口診誌 2: 181-187 1989.
- 8) Cutilli, B.J., Quinn, P.D., et al.: Traumatismatically induced peripheral osteoma. Oral Surg Oral Med Oral Pathol 73: 667-669 1992.